

送辞

灘光洋子先生の記憶

A Farewell Essay: Memories of Professor Yoko NADAMITSU

河合優子

Yuko KAWAI

灘光洋子先生と最初にことばを交わしたのがいつだったのか、はっきりとした記憶がない。私が立教大学に着任する前であったことは確かであるが、それがいつだったのかがどうも思い出せない。私が駆け出しの研究者だったころ、コミュニケーション学が新しい学問分野であること、そして研究者はアメリカの大学院で学位をとった人が多く、学会でも「学閥」や「上下関係」といったようなものをあまり意識することがなく、だれとでも比較的気軽に話ができる雰囲気があった。おそらくそのような中、学会の懇親会などで先生とことばを交わすようになったのではないか。

しかし、論文を通しての灘光先生との最初の出会いは、2000年に出版された *Similar or different?: The Chinese experience of Japanese culture* という論文であったことははっきりと記憶している。これは全米コミュニケーション学会 (National Communication Association) の異文化コミュニケーション分野のジャーナルであった *International and Intercultural Communication Annual* に掲載された論文である。現在は *Journal of International and Intercultural Communication* となって Taylor & Francis 社から年に4回出版されているが、当時は SAGE 社から年に1回、書籍という形で出版されていた。この論文を読んだのは、アメリカで異文化コミュニケーション論を中心に据えた大学院の博士課程で学んでいたころであった。院生であった私にとって、*Annual* で論文を発表することは一つの大きな目標であり、日本の大学で教えている研究者がこのジャーナルで論文を掲載していることにとても勇気づけられた。そして、「アメリカ人」と「日本人」、「西洋」と「東洋」といった、異文化コミュニケーション論ではよく使われていた二項対立的な枠組みにとらわれることなく、アメリカにおいては「アジア人」とひとまとめにされる人々の多様性に注目しており、とても新鮮だったことを覚えている。

異文化コミュニケーション論を専門とするといいいながらも、どうもそこから逸脱している私にとって、灘光先生は「正統派」異文化コミュニケーション研究者という存在であった。私の目になぜそのように映っていたのかと考えると、まず、先生がコミュニケーション研究の主軸である対人コミュニケーションを中心に研究をされていたこと、つぎに、異文化コミュニケーション論に関する幅広い知識と深い造詣をもっておられたことが理由として浮かぶ。先生は本号のエッセイにおいて、本学部・研究科で教鞭をとっておられた久米昭元先生らを第一世代とし、ご自身を

第二世代と位置づけているが、私は第三世代に属する。各世代の代表的な研究アプローチの特徴を非常に単純化した形で表現すれば、第一世代は実証主義的、第二世代は解釈学的、第三世代は批判的となるだろうか。先生は修士課程ではWilliam B. GudykunstとStella Ting-Toomey、博士課程ではYoung Yun Kimといった第一世代の代表的な研究者が在籍する大学院で学ばれ、第一世代の研究を理解した上で、それに対する違和感から第一世代の枠を超え、解釈学的な視点から質的な研究をしてこられた。加えて、2018年の共訳書『質的研究のための理論入門：ポスト実証主義の諸系譜』では「批判理論：ヘゲモニー、知の生産、コミュニケーション行為」という章を訳されており、批判的アプローチに対する理解も深かった。先述したように私は異文化コミュニケーション論を中心に据えた博士課程に在籍していたが、授業で第一世代の研究を批判する論文を読んだことはあっても、Gudykunst、Ting-Toomey、Kimといった第一世代の代表的研究者による論文を読んだ記憶はほとんどない。学部・大学院における異文化コミュニケーション関連の教育をより包括的な形で行うことができたのは、第一世代から第三世代までの研究アプローチをすべて理解している先生の存在が非常に大きかったと思う。

私にとって灘光先生が「正統派」研究者だったもう一つの理由は、先生の異文化コミュニケーション論、そしてコミュニケーション学という研究分野への「思い」である。先生はエッセイで異文化コミュニケーション論について「学術性と実践性、ジャンルを超えて隣接領域の知見を取り込む懐の深さを兼ね備え」ているとしているが、ここに先生の異文化コミュニケーション論に対する「思い」があるように思う。そして、先生はこのような異文化コミュニケーション論を授業や研究を行うなかで追求してこられたのではないだろうか。加えて、立教大学に異動する決め手となったのが、「異文化コミュニケーション」という名称をもった学部・研究科であったからということを経験の中で何度か聞いたことがあり、そこからも先生の「思い」は感じていた。「コミュニケーション」という名称の学部・学科をもつ大学は全国にいくつもあるが、提供されている授業はコミュニケーション学の一部の科目であったり、「コミュニケーション」が学問分野ではなく一般的な意味として使われていたりすることも多い。日本の大学でコミュニケーション学の授業を体系的に提供しているといえるのは、本学を含めて数校あるかないかである。それくらいに本学部・研究科はコミュニケーション教育において非常に稀有な存在であり、そこに先生は魅力を感じていたのではないかと思う。

専門領域が同じであることもあり、学期が終わると、その学期で蓄積された身体的、精神的な疲労を癒すため、酒（だいたい焼酎）を飲みながらたわいもない話をするのが慣例となっていた。その中に研究に関する話が紛れ込み、新たな発見をするなど、先生との交流は幾重にも味わい深いものであった。そしてこのような記憶は今後もつくられていけよう。